

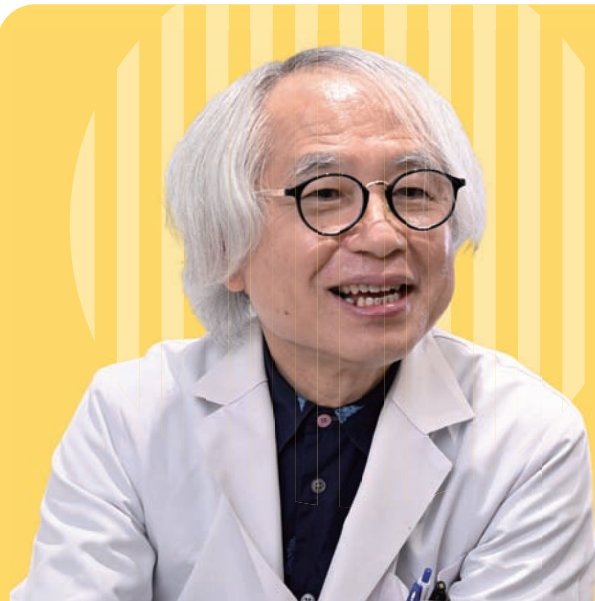
ルチアめる

吉村玲児・新院長 大解剖インタビュー
～臨床・教育・研究 そしてこれからの聖ルチア病院～



院長 吉村玲児

- 変化する精神科医療と、地域に求められる支援
- FOCUS／子どものこころの治療における“薬”との向き合い方
- TOPICS／“精神科の知りたい”が学べる、LUCIA Open Hospital



吉村玲児・新院長

大解剖インタビュー 臨床・教育・研究 そしてこれからの聖ルチア病院

臨床

Clinical

約40年間にわたり、多くの患者さまの診療に力を入れて取り組んできました。

精神科医療の臨床は「多くの経験に裏打ちされた直観」と「エビデンスに基づいた最新の標準治療の知識」の両方が、同じくらい重要だと考えています。

診療では、患者さまをよくみて、よく話をきくこと。症状だけでなく背景もよく観察して、先入観を持たずに考察、検証し、診断と治療を進めていくことが最も重要だと考えます。

さらに、日本や世界の標準治療や最新技術は日々進化し続けています。常に情報収集して知識をアップデートし、診療に還元していくことも大切にしています。私は今でも必ず、精神科分野の世界の動向をチェックすることを、寝る前の日課にしています。

教育

Education

精神医学講座の教授として、研修医や専修医、大学院生の指導に長年取り組んできました。教育でも、「臨床」で挙げたポイントを軸にして精神科医を育成してきました。特に診察では、患者さまをよく観察し、先入観を持たずに、患者さまの発言と行動、その背景をそのままカルテに記載して、考察と検証を重ねることが、精神科医としての素養を高めていくと指導していました。加えて、精神科医療では特に多職種でのチーム医療が重要です。精神科医は特にそのことを理解しておかなければならないと、伝えてきました。

こうした教育の経験を、当院でも若いスタッフの育成に役立てられたらと思います。

研究

Research

研究分野では神経薬理学とニューロイメージングを中心に取り組んできました。ニューロイメージングでも特に、脳内の神経のネットワークが、うつ病患者さまと健康な人にどのような違いがあるか、などの研究を中心に行ってきました。蓄積した臨床データを研究して論文を発表することが、精神科医療の進歩に繋がり、未来の患者さまの治療に役立ちます。研究や論文発表には今後も取り組んでいきたいです。

今年4月に吉村玲児医師が新院長に就任しました。吉村院長は大分医科大学(現・大分大学医学部)を卒業してから40年間、産業医科大学医学部で「臨床」「教育」「研究」に熱心に取り組んできました。その熱い思いと、吉村新院長の描く、聖ルチア病院の“これからのビジョン”について、話を聞きました。



聖ルチア病院でこれから 取り組みたいことを 教えてください。

これまで当院が培ってきた、地域住民から頼られる精神科の中核病院としての役割を大切にしながら、私が長年携わってきた産業医学の分野も発展させていきたいです。

その一つが「予防」です。昨年導入したMRIを活用した「脳ドック」による認知症の早期発見、早期介入へのアプローチを始めます。また働く人のメンタルヘルス支援は、これまでの産業医大での臨床研究を大いに活かせるので、今後も力を入れていきたい分野です。中小企業も含めた地域の多くの企業の「健康経営」に寄与する精神科病院を目指します。

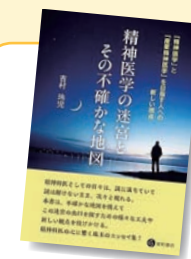
近年、うつ病予防、治療、寛解維持に関して、食事療法と運動療法が注目されています。脳と腸の関係性への研究も進み、うつを予防する食事も提唱されています。このような新しい知見を取り入れながら、管理栄養士や作業療法士などの多職種と共に、聖ルチア病院にしか出来ない精神医療に取り組んでみたいのです。

連携先の皆さまへの メッセージ

入職前から当院で診療する機会があり、開放的で明るい病棟での質の高い環境療法と、先進的な治療の両方が実践がされている病院だと感じていました。また入職してからは、スタッフの明るさ、モチベーションの高さ、そして患者さまに優しく親身になって関わる姿に、行動指針の「相手の身になって聴こう、語ろう、行動しよう」ということが根付いていると実感しています。

地域の皆さまには、精神科を特別な場所と思わず、身近な相談機関として気軽にご利用いただきたいと思います。軽症の段階から専門職が関わることで、症状の悪化を防ぎ、予防につながります。また、企業や組織のメンタルヘルスも得意としていますので、働く人のこころの健康支援にも、ぜひ一緒に取り組んでいければと思います。

AIや新しい技術の活用が進む中でも、精神科医療の本質は「人と人との関係性」の中にあります。患者さまに真摯に向き合う姿勢とチーム医療を大切にしながら、当院の伝統を受け継ぎ、地域から信頼される病院づくりに努めて参ります。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



吉村玲児院長の
約40年の精神科医療をまとめた
「精神医学の迷宮とその不確かな地図」
(星和書店)が出版されました。
ご興味のある方はぜひ一読ください。

INTERVIEW

変化する精神科医療と、地域に求められる支援

～診療報酬改定から見える精神科医療の方向性～

聖ルチア病院では以前から、精神疾患や障害のある方が地域で自分らしく暮らし続けることができる「精神科地域包括ケアシステム」の構築に取り組んできました。2026年度診療報酬改定でも、必要な治療を早期に行い、地域生活への移行と継続的な支援を進める方向性が示されています。診療報酬改定から見てくる精神科医療の変化や当院の取り組み、そして今後の展望について、坂井洋詞事務長と山口浩昭看護部長に聞きました。

近年の精神科医療を取り巻く環境の変化をどのように感じられていますか

坂井 精神科医療では、必要な入院治療を行いながら、できるだけ早く地域生活へつなげていく「地域移行」が国の方針として進められています。今回の診療報酬改定でも、地域生活を支える取り組みや関係機関との連携が重視されています。この久留米地域では、医療機関や福祉サービス、支援機関など地域のリソースが充実してい

るため、精神疾患や障害のある方が地域で暮らし続けるための環境が整ってきたと感じています。当法人では病院での治療に加え、訪問看護やデイケアなどによる在宅支援を行っています。法人内だけで完結するのではなく、地域の関係機関との連携によって地域移行を進めています。

最近では、外来受診時に就労支援施設や福祉施設の職員の方が患者さまに同行されるケースも増え、患者さまを支援するための情報共有がより円滑になっています。こうした積極的な連携が、患者さまの地域生活の継続につながっていると感じています。

山口 精神科分野の「地域移行」に関する講演などを依頼される機会も増えています。直近では、当院で10年近く長期入院されていた患者さまが退院し、地域で生活されるようになった事例について、地域の事業者やグループホーム関係者が集まり、意見交換を行う機会があります。地域全体で精神科医療や地域移行に関心を持ち、支えていこうという機運が高まっていることを実感しています。精神疾患があっても地域で生活し、活躍される方が、この10年ほどで格段に増えていると感じています。

事務長 坂井 洋詞

聖ルチア病院は、どのように変化していますか。

坂井 今回の診療報酬改定では、精神科急性期医療の充実や機能強化を後押しする方向性が示されています。症状が重い患者さまへ早期に適切な治療を提供し、その後の地域生活につなげていくためにも、急性期医療を担う医療機関の役割はますます重要になっています。当院では2023年に精神科急性期治療病棟を増床し、急性期医療に注力してきました。その結果、より重症度の高い患者さまが増えており、今後も急性期医療を担う精神科病院として役割を果たしていかなければならないと考えています。

山口 こうした流れを受けて、院内の病床機能も見直しています。例えば依存症を中心とする病棟では、アルコール依存症の離脱症状などに対応することが増えたため、患者さまがより安全に過ごせる環境を整備しました。また精神一般病棟では、地域の二次・三次救急医療機関から、認知症や精神疾患のある高齢患者さまを積極的に受け入れるようになりました。身体合併症のある方も増えていることから、医療用酸素設備を備えた観察室を増設するなど、院内機能の充実を図っています。

坂井 重症患者さまが増えたことで、予防や重度化防止への意識も高まっています。昨年度にMRIを導入し、まもなく脳ドックを開始予定にしています。また、認知症の初期段階で効果が期待される新しい治療薬に対応できる体制づくりにも取り組んでいます。

今後の課題や新たに取り組みたいことを教えてください。

坂井 今後は、医療と福祉がさらに連携しながら地域生活を支える仕組みづくりが重要になると考えています。特に相談支援については、今後ますます必要性が高まると



考えており、当院だけでなく地域全体で支えていける体制づくりに取り組んでいきたいと思っています。

また、地域のニーズや課題をより深く理解し、求められる役割を果たしていくために、病院の外へ出て地域の方々と交流する機会を増やしていきたいと考えています。

山口 地域移行が進む中で、ご家族や支援者、関係者の、患者さまへの関わりや支援の重要性はますます高まっています。また、患者さまやご家族が医療福祉情報に触れる機会も増え、求められる支援はより多様になっています。患者さまの権利を守り、一人ひとりに合った支援を提供していくためには、医療者には専門知識だけでなく、コミュニケーション能力や個別性を尊重した対応力がこれまで以上に求められるでしょう。時代によって制度や環境は変化しますが、当院が長年掲げてきた「相手の身になって聴こう、語ろう、行動しよう」という行動指針は変わりません。その想いを大切にしながら、これからも患者さま一人ひとりを支えていきたいと思っています。

看護部長 山口 浩昭

「子どもに精神科の薬を使う」と聞くと、不安を感じる方も少なくありません。今回は児童思春期疾患領域に関わる看護師に、子どもの薬物療法との向き合い方について話を聞きました。

子どもたちは、自分の不調や困りごとをうまく言葉にできないこともあります。だからこそ、表情や生活の変化、小さなサインに気づきながら関わることを大切にしています。

監修:中山 理恵
児童思春期病棟 看護師・師長



今回のテーマ

子どものこころの治療における“薬”との向き合い方

重要なのは「子どもの生活全体」薬は多様な支援の一手段

児童思春期疾患領域では、不安や抑うつ、発達特性による困りごとなどに対して、薬物療法が選択肢の一つとなる場合があります。一方で、「子どもに精神科の薬を使うこと」に不安や抵抗を感じる保護者も少なくありません。

児童思春期の治療では、薬だけで症状改善を目指すことはありません。お子さまとの関わりや心理的支援、家族支援、学校との連携など、多面的な支援を組み合わせながら進めていきます。薬物療法もそのひとつで、必要な支援を考える中で検討するものです。

当院の児童思春期の治療で大切にしているのは子どもの生活全体を見ながら関わることです。特に薬物療法中は、薬の効果だけでなく、学校生活や家庭での様子、生活リズムの変化なども確認しながら、眠気や食欲低下、不安の強まりなど、日常生活の中で困りごとが起きていないかを注意深く確認します。医師や薬剤師はもちろん、多職種で情報を共有し、連携して支援を行っています。



不安な気持ちはぜひご相談ください

お子さまだけでなく、保護者の不安に丁寧に向き合うことも重要だと考えています。「本当に必要なのか」「いつまで続けるのか」といった疑問を抱えることは自然なことです。

薬物療法が必要な場合も、薬を使う・使わないを急いで決めるのではなく、ご本人やご家族と相談しながら、各々に合った方法を医師と一緒に考えて治療を進めます。



児童思春期疾患領域で大切にしている視点

安心できる居場所づくり

発達段階に応じた支援

家族との情報共有

学校や関係機関との連携

生活リズムへの配慮

副作用モニタリング

多職種による継続支援

児童思春期疾患領域における薬物療法は、薬だけで解決を目指すものではなく、お子さま本人や家族を支えるための支援の一つとして行われています。大切なのは、それぞれのお子さまに合った、必要な支援を、多職種で一緒に考えていくことです。



“精神科の知りたい”が学べる

LUCIA Open Hospital とは……

TOPICS

LUCIA Open Hospitalは、医療専門職を目指す学生の皆さまに、精神科医療や当院について知っていただくイベントです。院内で患者さまがどのように過ごされているか実際に見て体験することで、教科書や授業だけではイメージしづらい精神科医療を、より身近に感じていただくことができます。また、当院スタッフとの座談会では、仕事のやりがいや現場のリアルな声を聞くことができ、多職種が連携して患者さまを支える精神科医療について理解を深める機会となっています。

LUCIA Open Hospitalには毎年、看護師、栄養士、作業療法士、精神保健福祉士、心理士など、さまざまな職種を目指す学生の皆さまにご参加いただいています。学校の先生方からも、精神科医療の現場を実際に見ることができる貴重な機会としてご評価いただいています。

おかげさまで今年で3年目を迎えました。LUCIA Open Hospitalに参加して入職した職員が、今度は後輩となる学生をサポートする姿も見られるようになり、大変うれしく感じています。

精神科病院というと敷居が高く感じられるかもしれませんが、しかし、患者さまと心を通わせられる瞬間や、多職種で支える奥深い医療など、精神科ならではの魅力があります。LUCIA Open Hospitalが、その魅力に触れるきっかけになればと思っています。



人事部長 関根 麻紀

LUCIA Open Hospital 2024に参加した看護師が活躍中!!



精神科病院には、どこか閉鎖的で暗いイメージを持っていました。しかし、LUCIA Open Hospitalに参加して、院内の明るい雰囲気や職員同士の温かい関わりに触れ、その印象は大きく変わりました。実際に現場を見ることができ、患者さまの様子や多職種が連携して支援する姿を知ることができ、「ここで働きたい」と思ったことを覚えています。

入職して1年が経ち、新卒スタッフに関わる機会も増えました。患者さまとの関わり方や声かけについて日々学びながら成長を実感しています。進路を考える際は、人から聞くだけでなく、ぜひ自分の目で見て、感じてほしいと思います。

看護師 兎洞 侑宣

【2026年開催要項】今年も6月と8月の2回開催します。

6月のLUCIA Open Hospitalでは…

6月13日(土)に今年度1回目となるLUCIA Open Hospital2026#1を開催しました。当日は21名の学生の皆さまにご参加いただきました。スタッフとの座談会をはじめ、精神科作業療法体験、依存症、児童思春期治療プログラムの紹介、治療食の試食会などを実施。参加者からは、「イメージしていたよりも開放的で温かい場所だと感じた」「他の職種のことも知れて良かった。真剣に就職を考えるときの選択肢が広がった」などの感想が寄せられました。



LUCIA Open Hospital 2026 #2

次回8月22日(土)開催!

【時間】13:00~16:00

【場所】聖ルチア病院

～プログラム～

- 作業療法体験
- 疾患別治療プログラム体験 (マインドフルネス・回想法)
- スタッフとの交流タイム
- スイーツバイキング

※事前のお申し込みが必要です。



※JR久留米駅・西鉄花畑駅より無料送迎あり

当院ではこれまで、EPA看護師候補者や技能実習生として来日したフィリピン人、ベトナム人スタッフが看護助手として活躍してきました。今年5月には、特定技能実習生としてミャンマー人12人が加わり、外国人スタッフは総勢16人となりました。

6年前に初めて外国人スタッフを採用した際に「外国人サポートチーム」を発足し、「生活支援」「日本語学習」「国家試験対策」の3つを柱に支援を続けてきました。ミャンマー人スタッフが来日した今年5月からは、サポートチームを25人に増員して体制を強化し、生活と業務、資格取得の側面から外国人スタッフを支えています。

来日直後は、買い物や家電の使い方などの日常生活に関するレ

クチャーや、日本の文化、生活ルールについて



ミャンマー人スタッフの歓迎会



日本人スタッフが業務のレクチャーや国家試験対策授業を行う

での研修を行いました。その後も、看護助手としての業務習得を支援しながら、一人ひとりの状況に合わせたサポートを継続しています。また、日本語学習や介護福祉士国家試験の受験支援にも力を入れ、職員や外部機関の協力も得て学習をサポートしています。

支援で大切にしているのは、日頃から関心を持ち、声をかけることです。サポートチームだけでなく全職員がサポートの意識を持ち、困りごとや不安に気づけるように心掛けています。

地域の外国人の働き手が増えていくことで、当院でも近い将来、多様な文化や言語を持つ患者さまが増えることが予想され、精神性などを真に理解できる外国人スタッフの活躍がより重要になります。そうしたことも見据えて、国籍や文化の違いを互いに理解し合える環境づくりを進めています。

メッセージ

「この病院に来てよかった」と感じてもらえるサポートを目指しています。外国人スタッフは、介護福祉士の資格取得を目指し、日本で懸命に学びながら働いています。地域の皆さまにも、彼らの挑戦や思いを知っていただき、温かく見守っていただければ幸いです。お気づきのことがあれば当院スタッフまでご連絡ください。

外国人サポートチーム
生活支援サポート
リーダー(看護師)

中村 信哉



Lucia Voice 読者の声を募集しています



ルチアめーるでは、地域の皆さまや連携機関の皆さまとのつながりを大切にしたいと考えています。誌面をご覧いただいた感想や、今後取り上げてほしいテーマ、精神科医療について知りたいことなど、ぜひお聞かせください。

皆さまからいただいた声は、今後の誌面づくりや情報発信の参考にさせていただきます。

〈こんな声をお待ちしています〉

- 今号の感想
- 印象に残った記事
- 今後取り上げてほしいテーマ
- 精神科医療について知りたいこと
- 当院へのご意見・ご感想

スマートフォンから簡単に投稿できます。
所要時間：約1分
※投稿は無記名で行えます。

※いただいたご意見への個別の回答は行っておりませんので、あらかじめご了承ください。



社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院
St. Lucia's Hospital

〒830-0047 福岡県久留米市津福本町1012

TEL0942-33-1581 (代表)

FAX 0942-33-1586

関連施設

- ・精神科デイケア、デイナイトケア、ショートケア
- ・重度認知症患者デイケア すずらん
- ・訪問看護ステーション クローバー
- ・訪問看護ステーション クローバー おおき
- ・グループホーム ルピナスⅠ・Ⅱ・Ⅲ

